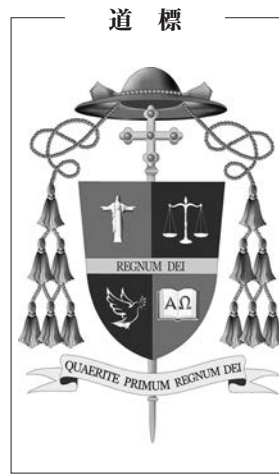




〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099(226)5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円



本田哲郎神父を招き研修

名瀬聖心教会で恒例の司祭大会

会議では司牧指針、年間行事を検討

1月21日(月)夕方から24日(木)正午まで司祭大会が、名瀬聖心教会カトリックセンターで行われた。参加者は、中野司教以下司祭、助祭、合計30人。最初の3日間は、フランシスコ会の本田哲郎神父を講師に招いて、「聖書の話

あれこれ」として研修を行った。イエスは、いつもパレスチナで一番評価の低い者に自分をたとえるが、「ぶどうの木」もその一つとして、エゼキエル15章2節以下を示して、それを証明するなど、聖書の根拠を示し

た豊富な資料の提供を受けながら「贖い」、「洗礼」など聖書の基礎となる言葉についての理解を深めることができた。3日目の夕方は、奄美の信者と共にミサをささげ、その後、カトリックセンターで交流会を行った。今回の大会を準備した奄美地区の司祭団が参加司祭・助祭にアンケートを事

前に、その結果を公表しながら、信者との親交を深めた。4日目は午前中にコンベンツスを行い、大会を終了した。

●司祭評議会 1月21日(月)午後2時、名瀬聖心教会カトリックセンターで司祭評議会が開かれた。主な議題は、鹿兒島教区司祭評議会の規約内容の確認及び一部変更と来年度行事予定の確定。今回の会議は、司祭評議会評議員の任期満了に伴う新しい評議員の下での最初となることから、まず、評議会規約の内容を通読しな

がら現状に適應するための変更を行った。そして、4月16日のコンベンツスで発表後、発効させることを決めた。

●コンベンツス 1月24日(木)午前9時、名瀬聖心教会カトリックセンターでコンベンツスが開かれた。主な内容は次の四つ。 一、司牧指針 中野司教は、「教会を支

司祭の消息

- ▼J・ムイベルガ神父(レデンプトール会・谷山教会協力)は、ドイツへ帰国
- ▼M・アッシャー神父(レデンプトール会・大口教会主任)は、ドイツへ帰国
- ▼萩原義幸神父(レデンプトール会・出水教会)は、教区外
- ▼B・ステイブ神父(鹿屋教会主任)は、3月25日付けで教区外

教区人事

- ▼郡山健次郎名誉司教(司教館)は、指宿教会管理者及び白百合幼稚園園長
- ▼竹山昭神父(ザビエル教会主任)は、ザビエル教会協力
- ▼小隈憲士神父(玉里教会主任)は、ザビエル教会主任
- ▼O・ベルナルディーノ神父(指宿教会主任)は、鹿屋教会主任及び鹿屋幼稚園

- 園副園長
- ▼鄭成添神父(ザビエル教会協力)は、出水教会主任
- ▼李秉徳神父(聖心教会助任)は、ザビエル教会助任及び玉里教会管理者
- ▼橋口啓悟神父(レデンプトール会・教区外)は、大口教会主任
- ※郡山名誉司教、ベルナルディーノ神父は4月1日付け、その他の司祭は4月28日付け。

司教の手紙

みなさまお元気でしょうか。今回は、「神の国と教会」についてお話したいと思います。イエスは神の国の到来についていろいろな譬え話を使って語りましたが、神の国が実際に地上に実現したのは、彼の死と復活によってでした。繰り返しますが、神の国とは、神の支配が実現した状態のことですが、それは罪と死に拘束されていた人間が、イエスの死と復活によってそれから解放されたという、イエスの弟子たちの理解によるものです。



イエスと3年間寝食を共にした12人の弟子たちが、師であつたイエスが敵に捕縛され、何の抵抗もできな

神の国と教会

鹿兒島教区司教 中野 裕明

なっていました。「復活の日の夕方」、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちの家の戸に鍵をかけていた。そこへイエスが来て真ん中に立ち「あなたたちに平和があるように」と言われた。：イエスは重ねて言われた、「あなた方に平和があるように。父がわたしをお遣わしになつたよう

もなく、不義への断罪もなく、ただ、平和を与えました。しかも聖霊を賜与して、人の罪を許す権能を賦与したのです。このイエスから赦された、という12弟子たちの体験が基礎となり、聖霊降臨を経て、教会が誕生するのです。聖霊を受けた12使徒たちが礎とな

「行って『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。病人をいやし、死者を生き返らせ、らい病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい」(マタイ10・7-8 新共同訳)この文章は生前のイエスが12弟子を派遣する場面の言葉として、マタイ福音書には収録されていますが、実際は聖霊降臨後、宣教活動を開始した12使徒たちの実態を伝えています。つまり、そこには、天の国(神の国)の実証として、病人のいやし、ハンセン病者の清め、死者の復活、悪霊の追放などが列挙されています。換言するならば、教会の宣教・司牧活動には、神の国の証が、当然伴ってしかるべきである、ということ

「現行の教区の組織の議論に入る前に教会の基本的生命を確認しておきたい。vocatio(神の呼びかけ)、communio(交わり)、missio(派遣)は教会共同体の本質である。主任司祭は、司牧指針『教会を支えている三つの柱』について信者と分かち合つてほしい。上(の組織)から下へではなく、下から上へと活動を行つていきたい。」この司牧指針について、中野司教が今後、教区報でも説明する。

二、来年度行事予定 ①中野司教の奄美訪問 原則出席の行事・会議は次の通り。 復活の主日、バイジュ祭、奄美の宣教司牧を考へる会(11月はレオ七右衛門祭と重なるため、19日の奄美地区司祭会に出席) ②レオ七右衛門祭 教区行事であるが、企画運営は川内教会主体で実行する。殉教日(11月17日)に近い主日に行う。 三、キリスト教伝来記念祭 昨年11月の司祭評議会とコンベンツスで、中野司教

四、教皇訪日 教皇訪日に当たり、信者がまとまって参加できるように教区が計画してほしいと要望が出された。これについては、教区本部が計画することになった。

玉里教会(主任司祭・小隈憲士神父)では、1月13日(日)主日のミサ後に合同班会を開催した。この日の班会のテーマは「中野司教の年頭の辞」について分かち合い。中野司教のモットー「まず神の国とその義を求めよ」についての理解を深めることで、信者としての働きを充実させようとしたもの。教区報では、小隈神父の講話(原稿)を紹介したい。

中野裕明司教様が鹿兒島教区の教区長として、司教職の重責を引き受けられたその覚悟は、司教紋章のモットーとされたマタイ福音書6章33節「まず、神の国とその義を求めなさい」に現れている、と私は思います。年頭の辞の中で、「もちろん『神の国』というテーマは、イエスご自身の生涯のテーマでしたし、イエスがもたらした、福音のキーワードです」と司教様が話しておられるとおりです。

中野司教の「年頭の辞」を分かち合う

2019年1月の玉里教会合同班会での話

玉里教会主任司祭 小隈 憲 士

そして、マルコ福音書1章15節(年頭の辞)は11章となつていますが、これは校正ミスです。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」というイエスの宣教活動の開始の重要なことばを取りあげています。イエスの宣教活動中の核心となるキーワードは「神の国」です。「神の国」とは神の支配が行き渡る、神の力がすべてに行き渡る、という意味に考えたら良いでしょう。この考えはイエス以前のイスラエルの民の中にあり、それが彼らの信仰でありました。その背景を簡単に触れてみますと、バビロニア捕囚以降、現実の彼らの生活と神の約束とのギャップを感じながら、将来、必ず神はご自分の力を振り、この地上にご自分の支配権を確立して下さるはずである、という意識が生まれます。そうして、「ダビデの子」を期待する信仰は生まれてきます。

この「ダビデの子」とは、最も理想的なイスラエルの王であったあのダビデ王の子孫から一人のメシア(救い主)が生まれ、政治的な独立を獲得して、イスラエル民族が世界の中心となっていく、というある意味現実主義的、政治的なものですが、とにかく、イスラエルの民は、このような神の支配の到来を待ち望んでいたわけですね。このようなイスラエルの民の「救い主」を待ち望む背景の中で、イエスは独自の福音を語られるのです。その第一声を福音記者マルコは、「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて仰せになった。時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ1章14、15節)と記しています。ここで言われている「時は満ちた」とは、今、ここに、神が人間に最終的な介入を始めた、正にその時が来た、と言うこととです。

そして、「神の国は近づいた」とありますが、これはあなたの方の目の前にやってくる。神の働きかけが始まっているのだから、あなた方はその呼びかけに応えなさい、と促しているわけですね。従って、「時は満ち、神の国は近づいた」と、それに続く「悔い改めて福音を信じなさい」という二つの部分は、前者が神からの呼びかけであり、後者はそれに対する人間の側からの応答を求めたものです。ですから、このように「神の国」は、神からの呼びかけと、それに対する人間の応答という対話的な構造になっているのです。

①「時は満ち、神の国は近づいた」と呼びかけ、この「神の国」について、イエスは福音書のどこを見ても、「神の国」は、何であるか、という定義は語っていません。福音書では、「神の国」はどのようなものである、というたとえを用いて、その特徴を表現しておられます。そのイエスの教えではつきりしていることは、「神の国」とは、

②次に、「神の国」を告げることが、ひとつの出来事である、ということと。③「神の国」は隠れたこと、何かが始まり、新しく変わる。つまり、救いの出来事が起きた、ということと。④しかも、その「神の国」は人間の想像力では思いもつかないような「新しさ」があり、それを神は私たち人間に準備して下さったのです。

⑤「神の国」は隠れた性格を持つものであること。ルカ福音書(17章20、21節)によれば、「さて、ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて仰せになった。神の国は目に見えない形で来るのではない。また、『見なさい、ここに』とか、『あそこに』とか言えるものでもない。神の国は実あなたの方の間にあるのだから」とイエスが語られたことが分かります。

⑥「悔い改めて、福音を信じなさい」 応答 神の呼びかけに対して人間がその呼びかけに応答する、受けとめることによつて、重要な意味を持つこととなります。ですから、私たち人間の側が神の呼びかけ、その思いを受けとめるかどうかは、どうでも良いことではなくて重要なことなのです。なぜなら、受けとめることによつて、「神の国」は私たちのうちに来ていることになるからです。「悔い改めて」とは、この場合には、まず、「神の国」が告げ知らされたことが前提になります。そうして、それまでのその人の生き方そのものが根本的に変わるものになります。ある意味、多く放棄し、「神の国」によつてもたらされる「新しいもの」は誰も思い浮かばないこととであり、それを受けとめるのですから、誰もが根本的な変化(回心)が求められるわけですね。

⑦「信じる」ことは、神の恵みをひたすら熱心に求めることですから、当然「祈る」ことに通じます。神からの呼びかけに一人ひとりがしっかりと真正面から向き合い、それに応えてゆく生き方が私たちの信仰生活なのです。それは、自分の目で見つかりと現代社会の生きる場の状況を見て、それを自分の頭で考え(思考して)、判断して、実際に行動してみるということです。そうして、自分のこころが感じるものとしつかり真正面から向き合いますと、私たちに絶えず呼び掛けておられる神の思いをストリートに受けとめて生きてゆけることができます。それが、人間(ひと)が人間(ひと)として生きていくことの証なのです。そして、その人のうちに「神の国」が実現しているのです。

つまり、「ダビデの子」を入れるだけです。「神の国」とは、このようなものだ、つまり、神の働きかけだ、というわけですね。

②次に、「神の国」を告げることが、ひとつの出来事である、ということと。

③「神の国」は隠れたこと、何かが始まり、新しく変わる。つまり、救いの出来事が起きた、ということと。

④しかも、その「神の国」は人間の想像力では思いもつかないような「新しさ」があり、それを神は私たち人間に準備して下さったのです。

⑤「神の国」は隠れた性格を持つものであること。ルカ福音書(17章20、21節)によれば、「さて、ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて仰せになった。神の国は目に見えない形で来るのではない。また、『見なさい、ここに』とか、『あそこに』とか言えるものでもない。神の国は実あなたの方の間にあるのだから」とイエスが語られたことが分かります。

このように「神の国」は隠れたものであり、すでに来ていると言われます。外的なもの、つまり、目に見えるものではないわけですね。だからこそ、あなた方には見分けにくいだろうが、私(つまり、イエス)の言うことはとても大切なこととであり、神による決定的なことだから、それを見逃さずことのないために、私にまつまづかないように、とイエスは言われます。「私にまつまづかない人は幸いです」。

⑥「悔い改めて、福音を信じなさい」 応答 神の呼びかけに対して人間がその呼びかけに応答する、受けとめることによつて、重要な意味を持つこととなります。ですから、私たち人間の側が神の呼びかけ、その思いを受けとめるかどうかは、どうでも良いことではなくて重要なことなのです。なぜなら、受けとめることによつて、「神の国」は私たちのうちに来ていることになるからです。「悔い改めて」とは、この場合には、まず、「神の国」が告げ知らされたことが前提になります。そうして、それまでのその人の生き方そのものが根本的に変わるものになります。ある意味、多く放棄し、「神の国」によつてもたらされる「新しいもの」は誰も思い浮かばないこととであり、それを受けとめるのですから、誰もが根本的な変化(回心)が求められるわけですね。

⑦「信じる」ことは、神の恵みをひたすら熱心に求めることですから、当然「祈る」ことに通じます。神からの呼びかけに一人ひとりがしっかりと真正面から向き合い、それに応えてゆく生き方が私たちの信仰生活なのです。それは、自分の目で見つかりと現代社会の生きる場の状況を見て、それを自分の頭で考え(思考して)、判断して、実際に行動してみるということです。そうして、自分のこころが感じるものとしつかり真正面から向き合いますと、私たちに絶えず呼び掛けておられる神の思いをストリートに受けとめて生きてゆけることができます。それが、人間(ひと)が人間(ひと)として生きていくことの証なのです。そして、その人のうちに「神の国」が実現しているのです。

最後に、苦難にある人(つまり、周縁に追いやられた小さな人々)は、神のみことばを必要としています。本当の生きたまひことば(つまり、主イエス・キリスト)は、苦難に耐えている人(つまり、人間としての尊厳を踏みにじられ、その苦しみの中に生きる人)に、ご自身を現わされ、ともに生きて下さることを心に刻んでおきましょう。

文芸


俳句

助祭叙階「サンバ」で祝儀のシスターたち

助祭さま胸つまらせてごあいさつ

祭壇に花いっぱいのお祝いかな

純心聖母会 山頭 信子



教区8人目の終身助祭誕生

川内教会出身の小島芳武さん叙階

2月10日(日)午後、川内教会(主任司祭T・メニッヒ神父)では叙階式があり、160人ほどの信者が参列



中野司教から授けを受ける

し、鹿兒島教区8人目の終身助祭誕生を見届けた。この日、終身助祭に叙階されたのは薩摩川内市高城

町出身のパウロ小島芳武さん(72歳)。上智大学卒業後、民間企業で働き結婚、数年前から家族から離れ故郷の川内教会で奉仕しながらこの日に備えてきた。午後1時から始められた叙階式のミサは、中野裕明司教の司式で、これに泉浩二神父ら10人の司祭が加わった。福音朗読後の説教で司教は、「この日の福音(ルカ5・1〜11)から、「漁師であったペトロたちはイエスとの出会いで、人を漁る者への道を歩んだ。これは転職(天職)。今日、終身助祭

に上げられる小島さんも天職としての終身助祭への道を選んだことになる。ペトロたちのように弟子としてのミッションに生きて欲しい」と話した。その後始められた叙階の儀では、池上利男終身助祭の呼び出しで司教の前に進んだ受階者・小島さんを主任司祭のメニッヒ神父が助祭としてふさわしい者として証言すると、これを受けて中野司教が助祭団に加える旨を宣言し、叙階の儀に入っていた。

叙階の儀では、受階者は司教から「司教と司祭団に奉仕すること」など助祭の務めについて訓話を受け、その後、配偶者を伴って受階者の約束を交わした。この際、小島さんの妻・真知

子さんは「助祭として働く夫を助けること」を約束した。その後、受階者は連願を受け、連願後の授手と聖別の祈りで助祭の聖位に上げられた。叙階式の後には、聖堂で祝賀会が行われ、喜びを分かち合った。

YCCのお知らせ
「ユース・カトリック・キャンプ」(YCC)が下記の要領で開かれます。奮ってご参加ください。
・3月27日(水)～30日(土)
・日向学院「海の家」(日南市)
・テーマ「招き」
問合先 ラ・サール高校 岩崎
電話 099-268-3121

中野司教を迎えて

瀬留小教区

1月20日(日)、私たち瀬留小教区に中野司教様の初ミサのプレセントがありました。通常、第1日曜日に実施される瀬留小教区にある七つの教会が、いっしょに集う合同ミサは、いつもの4割増しの信者さんで埋まっています。説教では司教様がモットー「まず、神の国と神の義を求めなさい」(マタイ6・33)について、その思いを話され、多くの方が大きくうなづいていらつしました。

「まず、神の国と神の義を求めなさい。何か特別な目立つ事ではなく、毎日祈りから始めましょう」と話された司教様の言葉、寄り添って下さる姿勢に感謝し、私たちも日々の中で信仰を培っていきたく存じます。(報告・星村文乃)

康由神父の聖書教室(11)

自分の感情を曝け出す 祈ることをめぐって



ルカ福音書では、弟子たちの「わたしたちにも祈りを教えてください」という願いの後に、イエス様は主の祈りを授けました(11・1〜4参照)。そして、この後、祈りの大切さについて補足するように真夜中に訪れてパンを所望する友の話をし(11・5〜13)。この中で「しつぷりに頼めば」という言葉をイエス様は使

われしました(15・8)。この「しつぷり」と訳された言葉には原語では「厚顔」、「無知」、「そして「忍耐」といった意味があります。また、この前では、訳出されられていませんが「不当に」という言葉があります。こうしたことから、この箇所を原語に忠実に訳すれば、「そのあつかましきには(さすがに)起きて彼に：与えるだろう」となります。

祈りという私たちには、主の祈りなどを唱えることを頭に浮かべます。しかし、アウグスティヌスは祈りについて、「大いに祈ることには、敬虔な絶え間ない心の呼びかけによって、神の戸をたたかなくては、事実、祈りは、言葉よりも嘆きによって、語ることよりも泣くことによつて成し遂げられます。」と語っています。祈りとは定型句を唱えることばかりではなく、時として感情をそのままにぶつけることも祈りであると言える

「祈りの意向」
福音宣教 キリスト者の共同体の権利の承認
日本の教会 原発事故の記憶を保持
ザビエル書院からお知らせ
3月26日(火) 27日(水) は棚卸のため休業いたします。ご了承ください。

でしよう。親しい友に語るように自分の思いを曝け出すことも祈りなのです。不平や不満を誰かに打ち明けたら、それは愚痴になります。しかし、それらを神様やイエス様に打ち明けたら祈りとなるのです。

- 面白くことには、ブライ語で「祈り」という名詞の語源は、「空しい」とか「愚かしい」を意味する形容詞にあります。これは、神様を信じない者にとつて祈りは空しいことや愚かしいことのように思える、ということであると考えられます。であれば、祈ることは如何なる時にも神様を信頼し続ける、という確固たる意志を表明することでもあると言えるかもしれません。人間的に考えれば厚かましいことでも、神様に嘆きと涙をもつて祈るのであれば、きつと聞き入れて下さることでしょう。
- 21日(木) 諏訪神学生助祭叙階式・カテドラル・11時
 - 22日(金) 性的虐待者のための祈りと償いの日
 - 24日(日) 四旬節第3主日
 - 25日(月) オリブの会・教区本部・14時
 - 26日(火) 山口好信神父叙階記念(1991年) 神のお告げ
 - 27日(水) 泉浩二神父叙階記念(1993年)
 - 28日(木) 濱崎眞実神父叙階記念(1995年)
 - 29日(金) コンタリーニ神父命日(1998年)
 - 31日(日) 明松尊吉神父命日(1992年)
 - 31日(日) 美島春雄神父命日(2016年)
 - 31日(日) 内野洋平神父叙階記念(2003年)
 - 31日(日) 四旬節第4主日
 - 〔司教日程〕 1日純心高校卒業式、3日祭壇奉仕者選任式、4〜6日韓司教交流(韓国)、12日牧師神父の会、15日純心大学卒業式、17日種子島教会ミサ、19日大口明光学園理事会、21日助祭叙階式、22日聖マリア学園理事会、24日徳之島宣教記念碑祝福、28日善き牧者会評議会

会と催し 3月

- 2日(土) YOCAT勉強会・唐湊司教館・15時
- 3日(日) 年間第8主日
- 5日(火) 田代神学生祭壇奉仕者選任式・カテドラル・9時
- 6日(水) 田邊徹神父命日(2018年)
- 10日(日) 灰の水曜日(大斎・小斎)
- 12日(火) 四旬節第1主日
- 14日(木) 牧師神父の会・教区本部・14時
- 17日(日) 柳本繁春神父叙階記念(1964年)
- 17日(日) 四旬節第2主日
- 19日(火) 〔司祭叙階記念〕 田原章神父(1953年)、関根悦雄神父(1984年)、坂本進神父(1984年)、田端孝之神父(1989年)
- 19日(火) 聖ヨセフ
- 20日(水) ゼローム神父命日(2003年)
- 20日(水) 成相明人神父叙階記念(1967年)、丸野六雄神父(1977年)
- 20日(水) 教区巡礼委員会・教区本部・19時
- 20日(水) 牧山田一神父命日(2018年)
- 20日(水) 〔司祭叙階記念〕 郡山健次郎名譽司教(1972年)、永山幸弘神父(1968年)、寝占敦之神父(1983年)、鄭法鍾神父、宋診旭神父(2013年)

ウガンダの旅2018

② ドーハの空港まで

谷山教会信徒 岩崎正幸

ワールド・ビジョン・ジャパンを通じて貧しい国の子どもへの支援を続けているラ・サール学園教諭の岩崎正幸さんは、昨年夏、支援している子どもがいるウガンダを訪問。帰国後、生徒のために執筆した「ウガンダの旅2018」の2回目を紹介したい。

出発前日7月27日。学校へ出て、浅井先生が受け取られたハガキ2枚を預かり、帰宅。ウガンダに着いたら、さっそく返事を出さなくては。

出発当日7月28日。台風12号の影響により、各地で交通の乱れ。鹿児島からの成田行きは、条件付きの離陸。成田空港に着陸できない場合は、関西空港か鹿児島に引き返すと。関西空港なら、まだ集合時刻になんとかなりそうだが、鹿児島まで戻ってしまうと、集合時刻に遅れる。なんとか成田に着陸できますように、と祈る。祈りが通じたのか、定刻で成田に着いた。

集合時刻までいろいろ時間つぶしをする。夕食はたぶん搭乗後機内食が出るから、そこにはお金をかけない。両替は成田ではウガンダの通貨、ウガンダ・シリングに換えられないことは案内があったので、まずは米ドルに換える。旅行社からの連絡で「50ドルもあれば十分ですよ」と言われたものの5000円くらいで6日間の旅行が大丈夫なのかと心配になる。念のため50ドル札を2枚準備する。

結局ツアー参加者21人が一堂に集まったのは、出国手続きも済ませたあと、搭乗カウンターの前であった。出身地と名前などの紹介。一度に20人も覚えられないはずはないが出身地、年齢構成さまざま、とわかる。別々にチェックインしたので、席もバラバラ。景色を期待して、窓側の席をとっていたが22時30分発・3時着だから、考えれば景色など見えるはずない。機内食での夕食を済ませて、眠る。3時の着陸まで、実際の時間は11時間のフライト。時差6時間のため、まるで4時間くらいしか眠っていないようだが、実際にはかなり



男性用モスクの入り口

り眠ったのだ。着陸体制に入り、カタールの首都ドーハの空港が見えてきたが、周りが結構明るいのに驚いた。こんな朝早くから活動が始まっているのだなあ。あるいは、夜

遅くというべきなのか。カタルは勢いのある国なのだろう。そういえば次回のサッカー・ワールドカップはカタルでの開催であった。着陸後タラップを降りて機外へ。バスでの移動。機外に出たとき、むちゃくちゃ暑かった。ドーハの空港は、ハマド国際空港という。王様の名前らしい。とても新しく、大きな空港。成田より大きいかもしれない。待ち時間が4時間ほどある。買い物するでもないが、店を回って時間つぶし。歩いていて、ふと思つた。そういえば、最近の空港は、礼拝室が完備しているというではないか。それと、女性用のモスクというのがあった。なるほど。案内で聞いてみた。「キリスト教の礼拝室はある?」それはなかった。「男性用

のモスクがこつちにあるからそこを使つたら?」と言われる。「十字架を出さなければいいでしょう」とためらいながらモスクの入り口へ。足を洗うための水

道栓がある。みなさんそこで足を洗つてから礼拝室へ入っていく。足を洗っている人に尋ねる。「入ってもいい?」「もちろん」。イスラムの神も寛大なのだ。(続く)

初めてモスクに入る。みなさん声を出さずにお祈りしている。お告げの祈りをす。つい、十字を切りそうになったがあわててやめた。(続く)

KJJP (鹿兒島正義と平和協議会) 通信 3月号

「死刑は許容できません。それは人格の不可侵性と尊厳への攻撃性だからです」

昨年(2018年)7月にオウム真理教の幹部や実行犯の13人に死刑が執行された。また同年12月には2人の執行がなされた。現在の政権下(第一次、四次内閣)において、46名の大量の人命が処刑されたことになる。処刑された死刑囚の中には、再審(確定判決の不当を是正する救済手続)を請求している人もいる。こうした大量の迅速な死刑執行は、当時衝撃を与えたが、今では忘れ去られようとしている。私たちは、この異常な事態を見直すこ

となく福音の視点でみていく必要がある。死刑は国家による「人の生きる権利」の侵害であり、認められなると私は考える。たしかに死刑制度については、犯罪抑止力、遺族の心情、犯人の更生などの論点から賛否両論がある。わが国の刑事司法は、死刑制度を前提にしており、また内閣府の世論調査では国民の多数(約8割)は死刑制度を肯定している。この問題についてキリスト者として、イエスの教えと生き方に基づいて考え、福音の光を当てるならば、現状を容認することはできない。死刑制度に反対し、死刑廃止の声をあげ

神が創造した人の「いのち」は「かけがえのないものである。たとえ罪人であっても「いのち」を否定してはならない。パウロは「申命記32・35」を引用した上で、「わたしの大切な人たち、あなたたちは自分で仕返しをするのではなく、神の怒りに任せなさい。」と言う(ロマ12・19)。神が罪人に望むことは何か。それは死ぬ(死なせる)ことではない。回心することである。主なる神は望んでいる。「悪人がその道か

ら立ち帰って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から」(エゼキエル33・11)。イエスも処罰よりも罪人の回心を求める。法律に反しているとして捕らえられた女性に対して「わたしもあなたを有罪とはしない。行きなさい。これからは、もう道はずれないようにしなさい」(ヨハネ8・11)と言った。死刑は国家による殺人であり、人間から回心の機会を奪い、神の救いを否定することにつながる。

今日(2019年)の社会において、いのち(人格)の不可侵性と尊厳への攻撃は、死刑制度以外にも多々ある。戦争のための基地建設、原子力発電の再稼働、子どもへの虐待、障がい者への差別等々。これらの問題について、福音の原則に立ち、祈り・学び・実践することが私たちキリスト者の課題である。(紫原教会 山下和実)

2018年8月1日付で発表された「カトリック教区のカテキズム」2017改訂版の日本語訳は、2018年12月13日に開かれた2018年度第2回臨時司教協議会において、以下のとおり承認・確定された。以降、当該箇所はこれに置き換えられる。

死刑 2267 合法的権威がしるべき手続を経た後に死刑を科すことは、ある種の犯罪の重大性に比した適切なことである。無論ではあっても、共通善を守るために許される手段である長い間考えられてきた。

しかし今日、たとえ非常に重大な罪を犯した後であっても人格の尊厳は失われぬという意識がますます高まっています。加えて、国家が刑事手続の意義に関して、新たな理解が広まっています。最後に、市民にしかるべき安全を保障すると同時に、犯罪者から回心の可能性を決定的に奪うことのない、より効果的な拘禁システムが整えられてきています。

したがって教会は、福音の光のもとに「死刑は許容できません。それは人格の不可侵性と尊厳への攻撃性だからです」と教え、また、全世界で死刑が廃止されるために決意をもって取り組まれます。

1) 教区カテキズム「カトリック教区のカテキズム」(2017改訂版) 2017年12月13日付 12/13/2017

来「合法的権威がしかるべき手続を経た後に死刑を科す」ことは適切である」と考えてきた。しかし教皇フランシスコはカテキズムの改訂を行つた。「死刑は許容できません。それは人格の不可

▼社会問題の分かち合い (毎月第三土曜日) 日時...3月16日(土曜日) 13時~16時

場所...教区本部会議室内 内容...今回は映画「わすれなれない ふくしま」上映 (14時~16時)